

美術教育の歴史に学ぶもの (学制の発布以降の歴史に対する一考察) 歴史の波に翻弄された「美術」

丸山浩司
多摩美術大学教職課程

本稿は学制の公布以降の公教育としての美術教育の歴史について、その流れに対する一考察を論ずるものである。我が国の美術教育の歴史は社会的の変革、政治・経済の流れに美術教育は翻弄された。本来、美術教育は芸術教育の一環として、人間形成に関わる教科であることは明白な事実であり、また、個性を発見し人間らしい生き方を育てより豊かな生活へと人間を導くものである。しかし、日本の明治以降の歴史は様々な歴史的事変を繰り返し、必ずしも人間の本来の生き方を保障したものではなかった。そうした悲しい歴史の中で、美術教育本来の理念は歪められ、理想的な美術教育は影を潜めた。そのような状況を紐解くことで、それらをいわば反面教師として捉え、歴史事実の中で発見できる要素を今後の美術教育の改善に活かしたい。

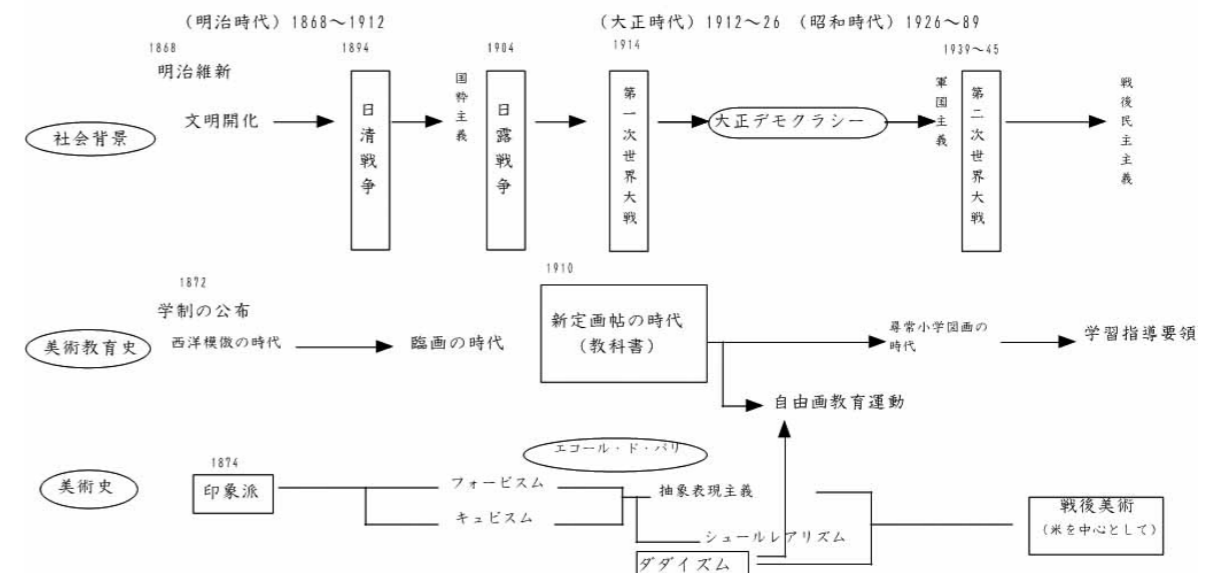
1. はじめに

学制の公布(明治5年)は1872年に成されて日本は本格的に公教育を始めることになる。しかし、幕末から大政奉還されるまでの歴史の波は大きく社会に影響したばかりでなく、鎖国によって国際的な交流のない状況の中では急激な近代化は多方に歪みを生じさせた。

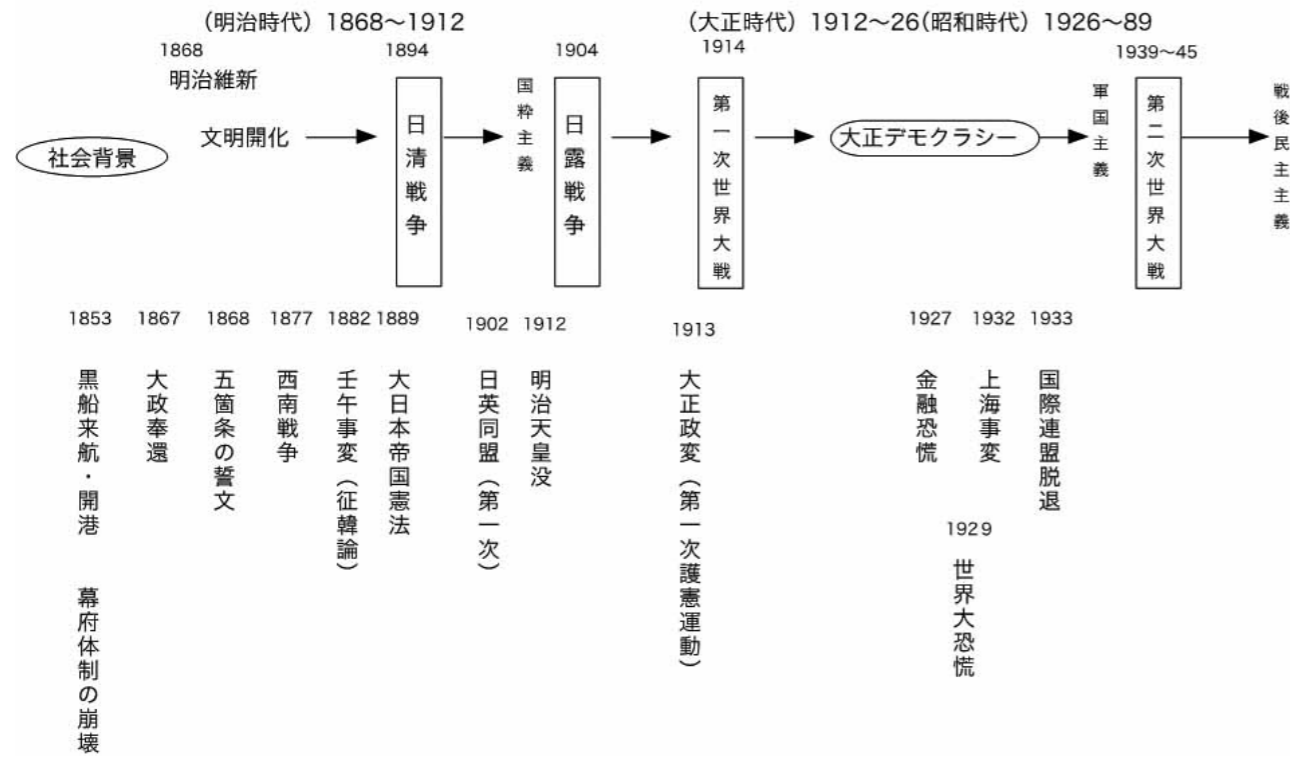
教育に関しては、欧米との格差を解消すべく、国民に等しく教育の機会が与えられ、成熟した社会形

成を急いだ。しかし、それまでの教育に対する考え方、つまり、封建社会の中での武士の地位保全を目的として庶民への教育は熱心ではなかったことから、幕末から徐々に階層間格差をなくした公教育を模索したにも拘らず、学制の公布を実施した時点では我が国独自の教育システムを構築することができず、当時、最先端の教育システムを有していたフランス、イギリスに倣う学校教育制度を作り、教育内容に関してはアメリカにも学んだことが窺える。

明治以降の歴史の概要



明治以降の歴史の概要



1872年に公布された学制は当初は外国の教育システムを真似ただけのおおよそ、オリジナリティーに乏しい消極的な制度であり、教育の理念や趣旨が十分に理解されないまま、見切り発車した感は否めない。

明治時代の始まりは江戸時代末期の(1867年11月9日)に江戸幕府第15代将軍徳川慶喜が統治権を返上し、翌10日に天皇が上奏を勅許した政治的事変である大政奉還を皮切りに1868年に明治天皇(当時15歳)が公卿(くぎょう: 国政を担う職位)や諸侯(貴族等の特権階級)などに示した明治政府の基本方針とした五箇条の御誓文によって、いよいよ欧米型の政治体制が確立された。

しかし、1877年に現在の熊本県・鹿児島県などにおいて西郷隆盛を盟主にして起こった士族による武力反乱は急速な近代化、欧米化が当時の日本を混乱させ、民衆の不満を煽ったが、この内乱を最後に我が国は安定期に入った。

そして、1889年(明治22年)2月11日に発布、1890年(明治23年)11月29日に施行された近代立憲主義に基づく大日本帝国憲法は1876年に公布されたオスマン帝国憲法に次いでアジアで2番目の近代憲法であり、安定的に運用された近代憲法としてはアジア初の近代憲法として日本の近代化が完成期に入り、日清戦争に勝利したことによって、先陣近代国家の仲間入りを果たし、明治政府は自信を持った。

しかし、この憲法はすべての権限を最高君位としての天皇に移譲し、ある意味、完全な民主主義を構築することが叶わず自由と個性を保障せず、封建的な政治体制を貫いた。

そのような状況下、フランスの教育制度を導入し、政府は義務教育をスタートさせ、階級制を廃し、身分に関わりなく平等に教育機会を与えることは民主化へ進むことと整合していたが、教科に対する見識は浅く充実したものとは言えなかった。

教科書は自由採択制でイギリスやアメリカの翻訳本を使用していた。内容は図法、図学的なもので芸術表現というよりは描画法の伝授が中心であった。

学制の公布により、学校教育がはじまり尋常小学において初等教育が始まった。学校教育のシステムは今のように合理的に考えられたものではなく、明治期の混乱がそのまま学制にも反映されていた。

現在の図画工作科や美術科に当たる教科は「野画」と「画学」で幾何学図法や透視図法、臨写と言われる模写を中心に美術教育がスタートした。

教科書『西画指南』はデッサンの心得として描く姿勢や図法としての線の引き方、描画法としての人体の部分図、さらに描画の典型としての花の書き方などフランスで当時用いられた絵画表現の描法を紹介

している。おおよそ、現在の技術家庭に近い教育内容であった。

児童・生徒に対してはこの教科書に掲載されている「お手本」を臨写(描き写す)することで基礎的描画能力を身に付けさせることを狙いとしていた。しかし、ただ、手本を引き写すだけの行為は児童・生徒の表現意欲を喚起できるものではなく、おおよそ芸術教科と呼べるものではなかった。

毛筆画の時代(明治20~30年)

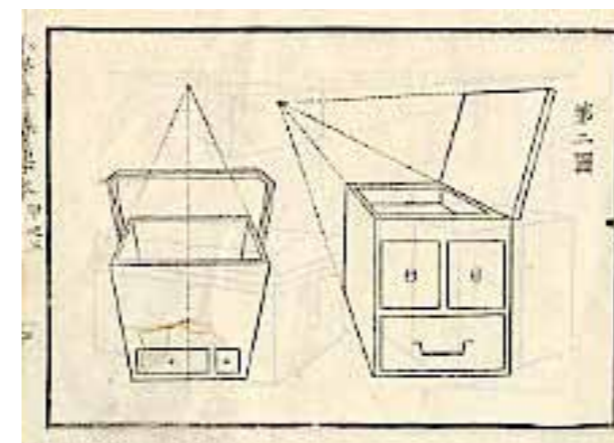
明治時代は熟成期を迎え、享樂的な西洋模倣の文化が蔓延した。こうした文化状況に憂いを感じる知識人は少なくなかったが、さらに欧米に派遣されていた調査団が相次いで帰国し、享樂的な文化の有り様に驚愕し、むしろ我が国独自の文化の再構成を唱えた。この流れは所謂政治的な国粹主義と呼び、瞬間に全国に広がった。この流れは美術教育にも影響を及ぼし、欧州に派遣されていた思想家・岡倉天心とアメリカ人で日本美術に造詣の深いフェノロサらは図画取調掛(明治18年)に徴用され、美術教育の見直しを始め、さらに東京美術学校(現東京藝術大学)を設立し、芸術性の高い美術教育の推進を試みた。

その試みとして日本画の流派・狩野派に協力を求め、新たな教育方法と内容を提唱した。狩野派の絵師にお手本を描かせ、これらを毛筆で臨写させた。これを「毛筆画の時代」(明治20~30年、1887~1897年)と呼ぶ。狩野派による情緒教育はそれまでの実利主義の無味乾燥なものよりも芸術性が高かったこともあり、当初は盛り上がりを見せた。この背景には鹿鳴館時代から国粹主義へと向かう国の事情との相乗効果によりこの教育形態は定着するかに思われたが、一流派に頼る教育はある種の権威主義を助長し、閉塞感が蔓延し、次第に下火になった。

この流れを作った岡倉天心は(東京美術学校の創立に貢献、第二代校長、日本美術院創設者)を



小学画学書



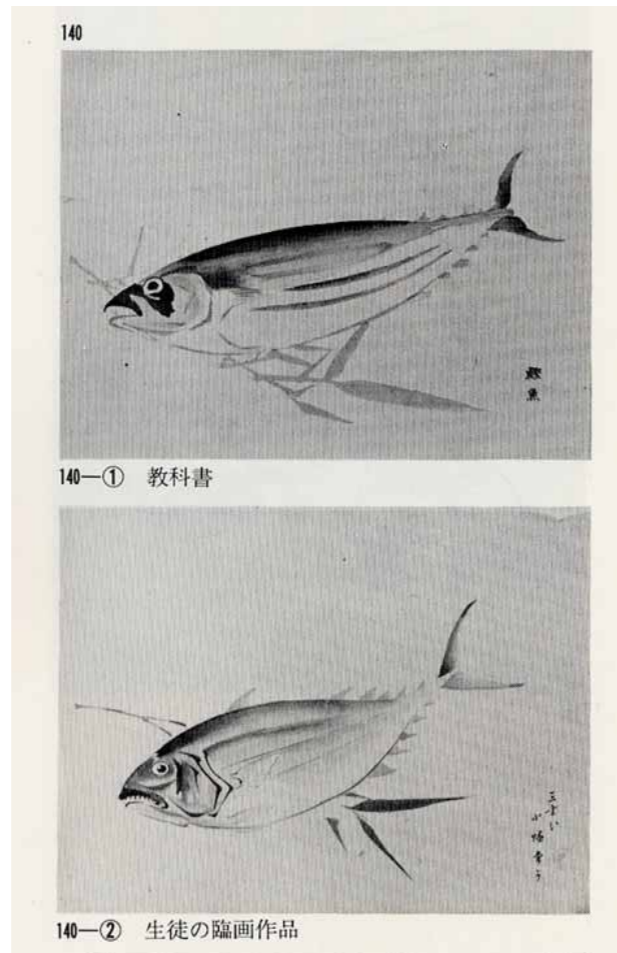
透視図法のページ

歴任した近現代の日本美術の創生に大きく貢献した人物で、それを客観的な視点でフェノロサ（東洋美術史家、哲学者）が支えていた。その意味ではこの「毛筆画の時代」は単なる一時代の区切りとして捉えることは適切ではない。

鉛筆画を批判し、表現の可能性を切り開いた点において大きな意味がある。しかし、やはり日本画の一流派による教育は偏向と言わざるを得ない。明治期の国粋主義は、江戸時代が終焉を迎え開国によって一気に流入した欧米文化に対して、日本国及び上層階級気取りの一部国民が間違った近代主義を標



狩野芳崖《悲母観音》



毛筆画による「臨画」の例

榜する一定の動きに歯止めを掛けるべく起こった政治的な社会現象である。

特に欧米に留学し、西洋文明を学んだ学者たちが日本の享樂的な西洋思想に毒された兆候に憂いを抱き、揺戻しとしての国粋主義を唱えた。美術教育においても日本美術の伝統の見直しを始め、狩野派を中心とした所謂日本画の中に我が国独自の美術を見出し、その傾向を美術教育に取り入れようとした。こうした美術教育の中心は当時創立された東京美術学校であった。具体的には鉛筆を毛筆に持ち替えて、墨によって、狩野派の絵師に描かせた「手本」を臨画（模写）するというものだった。狩野派は日本画壇最大の画派で、《洛中洛外図》や《唐獅子図》で有名な16世紀に活躍した狩野永徳の系列で、東京藝術大学大学美術館所蔵の《悲母観音》で有名な狩野芳崖

(1828～1888)によって継承され当時の日本画壇の中心人物として美術教育にも影響を与えた。

新定画帖の時代（明治43年～昭和6年）

このような時代の流れの中で、様々な批判を受け政府は美術教育の見直しを迫られた。当時はやはり、困った時の欧米頼みという風潮は払拭できず、欧米の美術教育に関する文献への調査が行われた。その結果、見い出されたのがアメリカの教科書である『Text of Art Education』である。これを下敷きに編纂されたのが『新定画帖』である。

この教科書は鉛筆画、毛筆画に関わらず取られた美術の教育方法で作品の仕上がり、素材へのアプローチや技法の訓練を主眼にした編集内容は、当時は画期的なものであったと推測できる。教科書は階梯方式をとり、ものの描き方を易から難へと順を追って生まれ、作例や指導に役立つノウハウが豊富で、教科に対してそれほどの自信を持ち得ない教師の救世主的な役割を担っていた。この教科書は国定であり、長く使用されたため、日本の美術教育の基礎を作ったと既定する研究者も少なくない。

「新定画帖の時代」は一般的に（明治43～昭和6年、1910～1931年）の間を指す。当時の文部省はそれまでの教科書検定制度を廃止し、明治43（1910）年に国定教科書としての「新定画帖」発刊した。この制度は明治37（1904）年、普通教育における図画取調委員会に教科書制度の見直しを諮問し、その結果としてこのような制度を図画取調委員会は答申した。この教科書は先にも記述した通りフレリッヒ、スノウ（アメリカ）の共著でアメリカの教科書『Text books of Art Education』をもとにしている。この教科書の優れている点は、教師用教科書を先に編纂し、指導体制を確立してから実際の学校教育の教科書にしたことにある。これは当時画期的なことであり、国定教科書（文部省）として全国一律の安定的な美術教育の提供を実践した。内容構成は「透

視画／構図／陰影／色彩／各種技法（形式的描画法）」であり、きめ細かく、しかもしっかりした構成になっていた。

内容構成の特徴としては以下の点が挙げられる。

- 1、階梯方式の臨画教育とは一線を画する一児童の発達（精神的、肉体的）に応じた描法訓練をしたこと。*実物をモチーフとした写生を中心に低学年には記憶画も取り入れた（実際は臨画中心）。
- 2、鉛筆画と毛筆画の優劣をなくし平等に扱った点。
- 3、小学一年から色彩表現を導入した（低学年：色鉛筆、高学年：水彩）。それまでは毛筆、鉛筆いずれもモノクロ表現だったことを考えるとこの点も画期的と言える。

新定画帖における形式的描画法とは用器画（レンダリング）を指し、的確な表現方法を解説している。

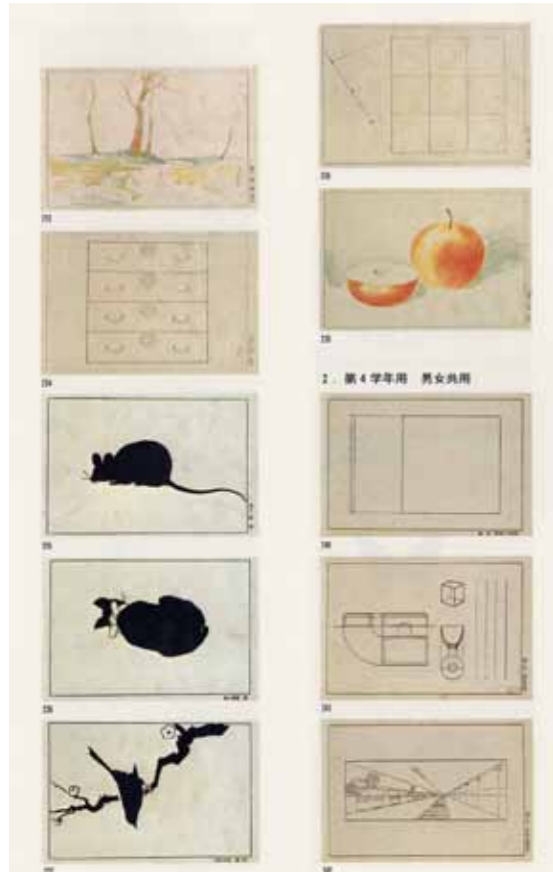
また、図学的な描画方法に関しては設計図の描き方や数学的な幾何学等何学も解説に加えている。臨画に関しては児童の発達に応じた手本の選定を行い、基礎的な描写力の育成を目指した。

さらに、自在画という概念も取り入れ、写生（実物の観察）を推奨した（実際はそれほど普及していない）。記憶画は初等教育においては知的なリアリズムに訴えかけ、考案（デザインにおけるアイデア）に関してはデザインの概念にも言及している。

この教科書は豊富な資料掲載が特徴であるが、当時はまだ印刷技術が進歩しておらず、印刷は劣悪だった。（石版等の技術が定着せず）教科書の基本理念は西洋の美術教育研究としてのローエンフェルドの発達論やルソー、ペスタロッチの芸術教育の本質論、さらにチゼックの児童美術論（大人を基準とした稚拙な表現としての児童美術観を批判）も考慮されている。

参考

- フランツ・チゼック (Franz Cizek, 1865-1946)
オーストリアの美術教育者、幼稚園の創立者。



新訂画帖のページ

幼児教育こそ人間教育の原点であり、その可能性を幼児の絵画の独創性と想像性の中に見出し、教条主義的な教育を批判した。

○ビクター・ローエンフェルド (Victor Lowenfeld 1903-1960)

オーストリアの心理学者

チゼックの幼児、美術教育に影響を受けたローエンフェルドは子どもの絵画の表現上の特色を様々な角度から検証し、子どもの心身の発達と絵画表現上の変化を結び付けて、新たな美術教育の方向性を示した。

○スロイド教育

1880年頃にスウェーデンで創設された学校教育の一教科で木工、金工、布加工を中心にした、所謂労作教育。この教科は現在でも存在する。日本では「技術・家庭」がこれに当たるとされるが、実際は工芸や生産デザイン領域に近い。

*スロイドシステム (労作による手工教育)

*チゼック：児童美術はそれ自体が独自の高度な表現であると説いた

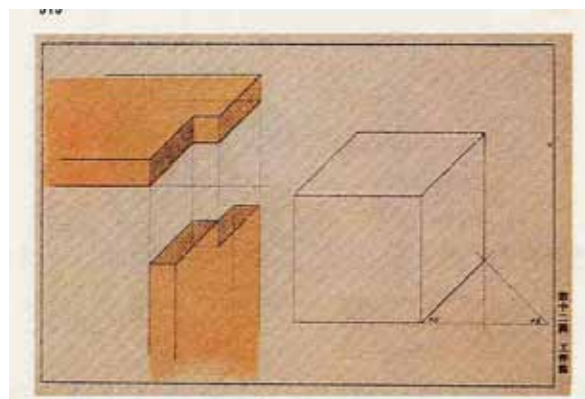
*スロイド

「非職業的に営まれる、手による 目的対象物の製作 (例：木材あるいは 金属、また、裁縫・織物を通しての製作)」

自由画教育運動の時代 (大正6年～昭和11年)

新訂画帖は多角的に研究された優れた教科書であったことは疑う余地はない。しかし、我が国の国民性や国の事情 (明治時代という封建的な社会) はこの教科書の良さを活かしきれない教育環境を作った。さらに指導力に問題のある教師の存在が、この教科書を持って余し、現場に混乱を齎し、教員の不満をおおったと言われている。

図画、美術教育は児童、生徒の自発的な自己表現の実現が第一義的と思われるが、新訂画帖はファ



新訂画帖のページ (高学年)

インアートを軽視し、実利主義的、デザイン重視の中で窮屈な教育を進めざるを得なかった。そのような状況にあつて、ヨーロッパに留学していた「山本鼎」が帰国し、日本の閉塞感が漂った美術教育の現状を目の当たりにした。山本は20世紀初頭のヨーロッパ近代美術に衝撃を受けたと言われている。山本自身は画家である。氏は明治の文豪とも交友があり美術理論研究にも造詣が深い。略歴を記す。

山本鼎

1882-1946 (明治15-昭和21)

愛知県岡崎市に生まれる。木版の工房に奉公し木口木版技法を習得。

1902 (明治35)年 東京美術学校入学

1904 (明治37)年 雑誌『明星』に木口木版《漁夫》を発表、新たな“刀画”として注目される。

1906 (明治39)年 東京美術学校卒業

1907 (明治40)年 森田恒友、石井柏亭らと同人誌『方寸』を創刊、創作版画運動の先駆をなした。

1912 (明治45)年～1917 (大正6)年：滞欧。帰国後、再興日本美術院洋画部同人に招聘、滞欧作《ブルトンヌ》等を発表。

1918 (大正7)年 織田一磨、戸張孤雁らと日本創作版画協会を設立。

1919 (大正8)年 長野に日本農民美術研究所を設立。

自由画運動を推進。

1946 (昭和21)年 長野県上田市に没する。

同地に上田山本鼎記念館がある。

山本鼎のエピソード

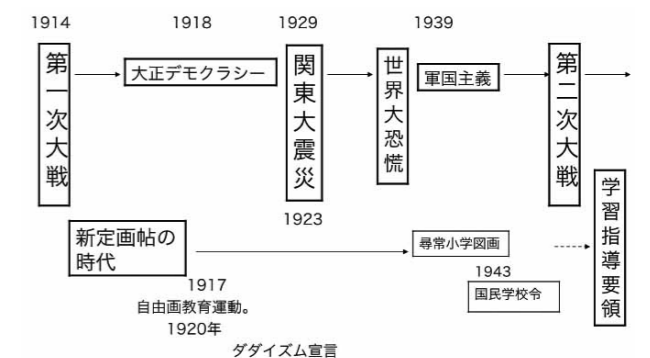
小学校4年を卒業した鼎は東京の木版工房主、桜井虎吉に弟子入りし、木口木版の彫版技術を学び、その才能を発揮した。キリンビールのラベルの原画は鼎12才の頃の作とされている。上田城跡公園の



山本鼎《漁夫》木版 16.2×11cm



山本鼎 キリンビールのラベル原画



中にある山本鼎記念館にラベルのオリジナルが展示してある。

山本は印象派、ポスト印象派の新しい絵画表現に衝撃を受け、芸術に一番大切なことは自由と個性であることを悟った。帰国して日本の美術教育の現況を見て、そこにある問題点を容易に見抜いた。封建的な社会にあって合理性優先の新定画帖が当時の学校教育には馴染まず、さらに教師の力量がこの教科書の内容構成についていけず、結果として、美術教育が形骸化していることに気付いたのである。

1917年に帰国した山本を待っていたのは、日本における政治改変としての「大正デモクラシー」である。この風潮は山本的美術教育への改革意識に拍車を掛けた。山本はすぐに美術教育の改革のために自らの考えをまとめた。彼が最も重要視したのは児童、生徒の自発的な自己表現である。そこで着目したのは「臨画」である。新定画帖は写生の概念も取り入れていたが、実際はその趣旨が十分に理解されておらず、臨画が中心だったのである。これを山本は「不自由画」と呼んだ。山本は児童・生徒の自己表現を保証するためにはその反対である「自由画」を推奨することを自らの考えの中心に据えた。

山本は自由画を推奨するために運動を起こすことになる。自由画教育運動（大正6年～昭和11年、1917～1936）である。大正7（1918）年長野県神川小学校で「児童自由画の奨励」と題した講演を行った。そこで彼が説いたのは不自由画＝臨画であり、本来の児童・生徒の絵画表現は自由であるべきで、これを「自由画」と呼んだのである。その理念は写生主義、芸術主義、創造主義、児童主義——この四つの主義に基づくものである。

この考えはヨーロッパの近代絵画の基本思想によるもので、まず写生主義とは、生きたモチーフ（対象）をそれぞれの児童・生徒が感じたまま再現させる趣旨である。

芸術主義では、文字通り真の芸術とは表現者の



348 林みづ子さんの像 尋小3



自由画の作例

感性、思想が元になるべきものとした。

創造主義では、新たな世界を構築することが何よりも大切であると説いた。

児童主義とは、まず主役は児童・生徒であるという考えである。

これらの考えを社会、取り分け現場教師に訴えか



教科書と自由画の作例

けた。現場の美術教育に不満を抱いていた教師にとって、山本の言葉は説得力に富み、瞬く間に全国に広がりを見せた。この運動の中で山本は様々な活動を実行した。

注目すべき山本鼎の言葉に次のようなものがある。「自分の直接感じたものが尊い。そこから種々の仕事が生まれてくるものでなければならない」つまりは誰からも束縛されず、自らの考えに基づいて行動すること、その延長に本来的な表現が実現すると説いた。その考えを大正8（1919）年中央公論に「自由画教育の主調と題された論文」として発表した。

大正10年『農民美術』を出版。これらの書物は明治期の『明星』『白樺』『方寸』『赤い鳥』等の自由思想による文化的啓蒙活動に影響されたものとされる。

山本自身は有能な芸術家であり、さらに自由画教育と農民美術に生涯を捧げた（長野県上田市に記念館）。

自由画教育運動は欧米の美術事情が背景にある。印象派は元より、第一次大戦後のヨーロッパ、シュールレアリズム、ダダイズム（近代から現代への移行期）の影響もある。そして、自由画教育運動を進めるに当たって、山本は画材の開発にも取り組んだと言われている。クレヨンの開発である。西洋で

一般的に使われている所謂パステルは高価なばかりでなく、定着力が弱く難しい画材であるので、手軽な描画剤とは言えなかった。そこで山本は顔料に蠟（ロウ）成分を混ぜることを思い付き、クレヨンが誕生した。しっかりした固形の描画材が使い勝手がよく、ロウ成分が水を弾くので、水彩絵の具と組み合わせると思わぬ効果を生み出すことも児童生徒の表現の多様性に寄与した。さらにクレヨンは何かを表現したいと思った時にすぐに使える即時性のある描画材として効果を発揮した。今では当たり前になったクレヨンもこうした山本の情熱の産物と言える。

さらに文部省の指示が画一的で、教育の均等化は保持できるものの、各地域で独自の教育を進めることを良しとせず教育そのものが低調なものになったことも運動を盛り上げた要因である。

農民美術を推奨したことは（農閑期の過ごし方）美術の大衆化を進めることに成功し、美術に対する偏向、誤解を解くことに繋がった。山本は農民美術を美術教育の一環と捉えていた。土産品を作ることを目的にはしていなかったが、結果として農民の手掛けた木彫人形や、染色された布製品は人気を博し、貧困にあえいでいた農民を救ったとも言われている。まさに瓢箪から駒、山本がまさに民衆に目を向けていたことが本来的な美術教育を我が国に定着させた最大の要因とも言える。

自由画教育運動の功績は非常に高く、現在の美術教育の礎を作ったと言える。

尋常小学図画の時代（昭和6年～15年）

この自由画運動は新定画帖の時代と重なるが、その後、文部省はこの運動の盛り上がりを見直した。新定画帖の見直しを迫られた。新定画帖の改編は実利性を排し、ファインアートとデザインの棲み分けを徹底した。つまり、ファインアート重視を打ち出し、山本の提唱する児童主義や創造主義を反映させることを試みたと思われる。

しかし、実際は現場教師の間では自由画ブームは下火となり、基準の無い絵画指導に戸惑う教師も少なくなかった。今でこそ、本来の民主主義のもと、個性尊重や真の自由が我が国には定着しているが、民衆の間ではまだ政治レベルの民主主義は定着しておらず、家族制度や村社会での規律が優先される国民性は様々な面に影響を及ぼした。美術教育もその例にもれず、昭和初期に出版された『郷土化の図画教育』(学校美術協会刊)はそうした教師に支持された。そのため、文部省は自由画運動と一線を画し、新定画帖の再編に取り組んだとされる。

新定画帖を再編した『小学図画』はそれまでの批判や意見を反映させた戦前の教科書の集大成と位置付けられているが、臨画を支持する風潮も生まれ、美術教育の歴史の中では後退、あるいは停滞期と思われた。これを尋常小学図画の時代(昭和6年～15年、1917～1936)と呼ぶ。

しかし、川喜田・武井らによってまとめられた『構成教育体系』はバウハウス研究をもとにしており、教育内容のレベルアップは確実に図られていた。

国民学校令の時代(昭和16年～20年)

その後の国民学校令の時代(昭和16年～20年、1943～45)は我が国の忌まわしい歴史を反映して、ほとんど見るべきものはない。

軍国主義、全体主義の中で、図画工作、美術教育は実利主義に終始し、絵画表現はほとんどがプロパガンダで、戦意高揚、戦争の正当化のために利用された。とても憂うべき時代と言える。

終わりに(まとめ)

戦後の教育は文部省主導による学習指導要領にしたがって進められた。この制度は教育の機会均等やレベルの維持に寄与しながらも、教育そのものを拘束するものではなく、安定的な教育制度として戦後70年余、続いている。

我が国の近代化の中で制度としての学校教育が始まったことは画期的と言える。フランス、イギリス、アメリカといった先進諸国の教育に倣って、国民に等しく教育が進められたことは評価に値する。しかし、真の芸術教育としての図画、美術教育はその時代の流れ、バイオリズム、社会的背景のうねりに翻弄され、本質的で理想的な理念に基づいた美術教育が進められたとは決して言えない。

やはり、ルソーの「エミール」⁽¹⁾、ペスタロッチの陶冶、ハーバート・リードの「芸術による教育」⁽²⁾の理念に学びながら理想的な芸術教育としての美術教育の道を探ることこそが大切である。

その意味では戦後の教育は学習指導要領制度の中で安定的に進められていると前記したが、それでもその時々の変容に敏感に呼応しながら改訂を繰り返す指導要領についても冷静にその動向を見極めていくことが大切である。

【参考文献】

新関伸也(滋賀大学教育学部教授)「明治、大正、昭和、平成の図画工作・美術教科書—美術教育の歴史を読む—」

蜂谷昌之(広島大学)「昭和前期における図画教育の変容—高岡の二つの小学校所蔵作品を手掛かりとして—」『美術教育学研究』第48号、大学美術教育学会、2016年

⁽¹⁾『エミール』(仏: Emile) は、1762年に刊行された、フランスの哲学者ジャン＝ジャック・ルソーの教育論。

⁽²⁾ハーバート・リード(Herbert Read、1893-1968) イギリスの詩人、美術評論家、美術教育研究者。『芸術による教育』1943年刊行。芸術を基礎とするラディカルな教育システムを展開した名著。